



1953年、大戸川で野外調査中

末石富太郎

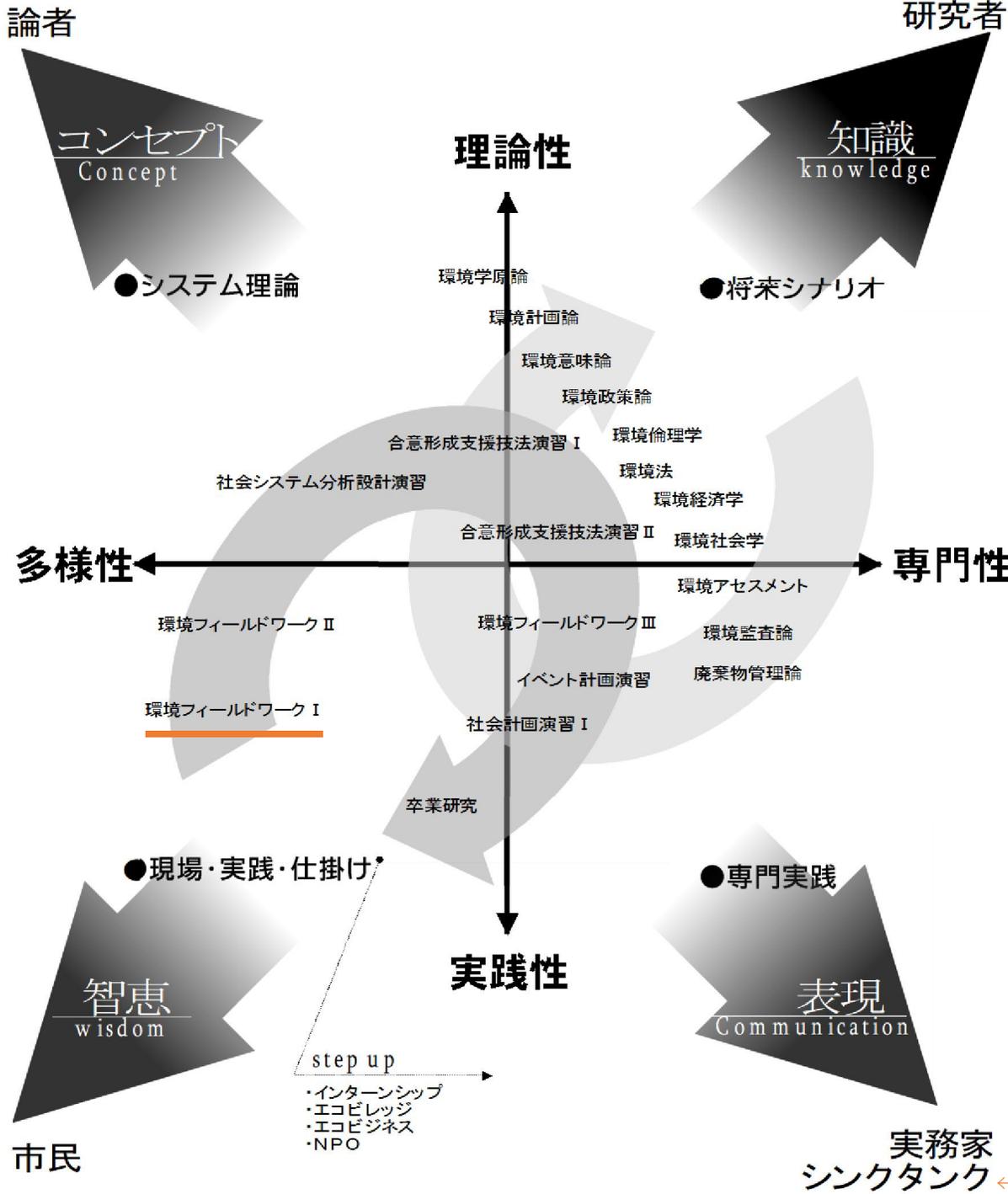
『地域研究法』

の（ ）

近藤隆二郎

元滋賀県立大学環境科学部

kondoji2007@gmail.com



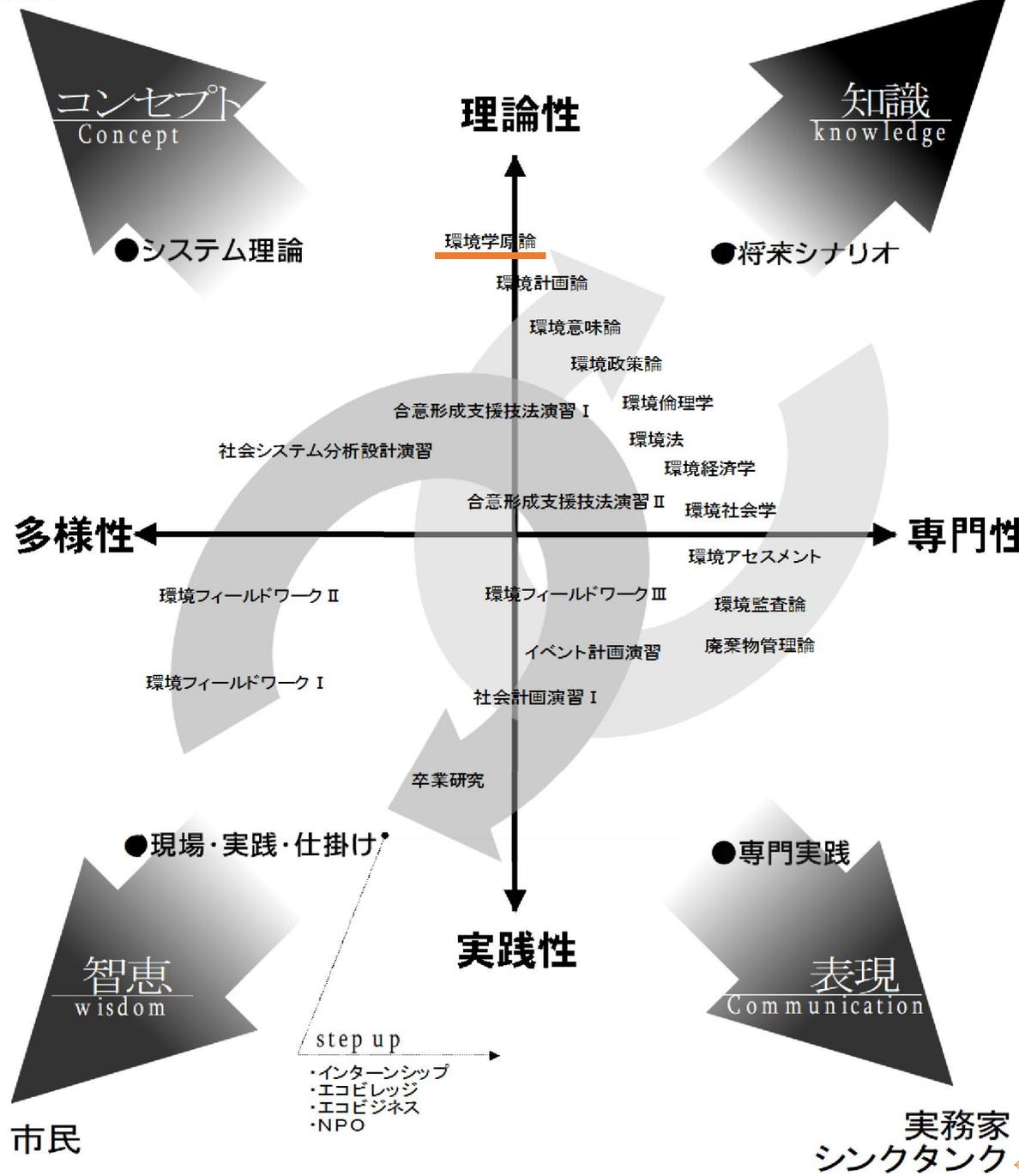
環境フィールドワーク I

環境科学部1回生必修科目
初回の全体講義



論者

研究者



環境学原論

環境科学部2回生必修科目



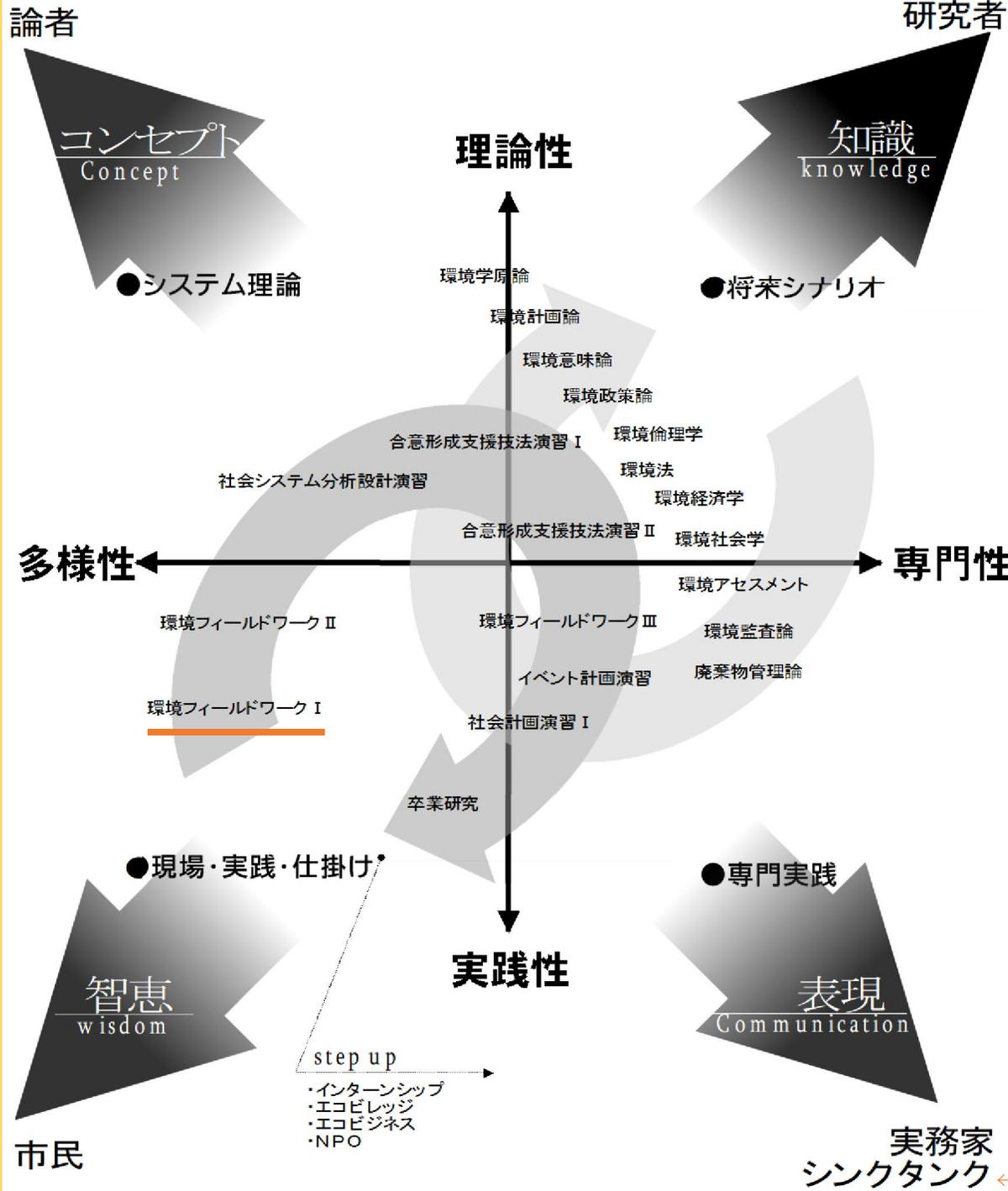
テーマ



講義の内容

近代主義や既存の教育が**軽視してきた**環境と環境問題 (Environmental Issues) の再認識。

環境認識の発展と問題点を多角的に指摘し、問題に取り組む基本的視点を示し、人間が自然を含む環境の中に自己を位置づけ直す**新しい学問体系**を展開する。最重要の視点は、環境の有限性と科学の可能性の限界、強者の論理にもとづく学問、世界史の書き換え、などである。



環境フィールドワーク I

環境科学部1回生必修科目

初回の全体講義「地域研究法」



地域研究法

末石 富太郎

目次

- 1 私のフィールドワーク事始め
- 2 地域研究と地域学
- 3 研究対象としての地域
- 4 地域分析と意志決定支援技法

1 私のフィールドワーク事始め

私がフィールドワークを最初に行った土地は、滋賀県の大戸川流域、1953年のことである。課題は、大学院での指導教授が滋賀県土木部から受託研究「瀬田川洪水時の含砂量の推定調査」で、教授から研究費20万円を預かり、同僚や学部4年生を1人ずつ助手にして約2ヶ月かけて実施した。

当時、流域の田上山地は相当な禿げ山状態で、ために降雨時の砂礫の流出が多く、これが大戸川から瀬田川へ流出・堆積するので、瀬田川の洪水疎通能力を阻害する。しかし洪水時の現場観測は事実上不可能なので、平時に川と流域の特性を観測・測定して洪水時の流砂量を推定せねばならず、その前段としては流砂を支配する洪水時の流量を雨量と対応させて予測するという順序を踏まねばならない。流域内には数ヶ所の降雨観測点があったが、大戸川の水位の年間変動は最下流の黒津にしかないので、いくつかの降雨条件で黒津水位を計算して観測データと比較し、水文モデルのパラメータを決めていく、という順序になる。

フィールドワークに求められるのは、流域と河川自体の各種の基礎特性で、地形図からかなりの情報を得られるが、河川流路の断面形や川底の砂礫の性状や堆積状況は現場を踏査せねばならない。また、河川工学の講義では、雨水流出の計算法を習ってはいるが、フィールドワークの方法はいきなりブツツケ本番で、すべて自分で工夫せねばならなかった。自動車はもちろんないから大がかりな測量器具は使えない（もちろん使ってもそれだけの精度は必要ない）。したがって、用具は持って歩けるものだけに限り、傾斜測定用のクリノメータ、距離は歩測と物差し1本でスタジアの原理応用、あと簡易流砂量観測用のトラップを自作した。もちろんデータ記録用の野帳（フィールド・ノート）は必携である。

交通の便は、国鉄で信楽まで行けたがそれ以外は何もなく、往路は信楽まで徒歩、帰りは国鉄、そのかわりときどき、長靴をはいた出で立ちのまま、瀬田の料亭で食事をした。こういう服装で野外でウロウロしていると、集落に近いところでは必ず地元の人が寄ってきて、何をしてるのか？何ができるのか？と話しかけられる。こういうとき、「大雨が降ったらどこまで水がくるか？」などと尋ねて、データの補強をするのもフィールドワークの大事なコツである。

ここでは、詳細な結果を述べないが、大学の教員になってから学生を引率して現場観測をするとき、道具がそろっているからいい調査ができるとは限らないことを

1. 私のフィールドワーク事始め

- 私がフィールドワークを最初に行った土地は、滋賀県の大戸（だいどう）川流域、1953年のことである。
- フィールドワークの方法はいきなりブツツケ本番で、すべて自分で工夫せねばならなかった。
- 道具がそろっているからいい調査ができるとは限らない

2 地域研究と地域学—いまなぜフィールド・ワークか？

2.1 地球シナリオからみた地域研究

教えるためのよい経験になった。

2 地域研究と地域学—いまなぜフィールド・ワークか？

2.1 地球シナリオからみた地域研究

当時からすでに、土木工学でさえ、学問といえば書斎派や実験室派が中心であった。これを野外科学派に転換することも含め、科学のスタイルや大学の存在理由を問うわけをまず説明しておく。

人間と学問との今後の関係を最も強く規定するのは地球環境問題であるが、問題の複雑さにもとづく将来予測の不確実性、100年単位で影響が残存する長期性、同じく国境を越えた広域性などからみると、最近約200年の近代科学の成果もほとんど無力になるはずである。

したがって少なくとも、環境汚染問題を軸にした学術体系への挑戦を人類全体が志向し、しかもその確立をまたずに何らかの対策シナリオを描くという発想が必要になる（詳しくは2年の環境計画学で講義）。過去の学術分類に従えば、体系は大きくは3つに分かれる。第1は生態汚染現象についての徹底した自然科学的研究、第2は何が汚染源なのかに関する透徹した（常識的な判断ではなく、その根底に横たわる見えにくいモノを見るのがビジョンである）社会科学的研究、第3は、第1・2の上につつま人類史的考察である。

人類滅亡のシナリオを描くのもかなり困難だが、人類存続のシナリオづくりはそれ以上にむずかしい。平均的にみて最大の汚染源である「都市」という人口の塊りの存続を前提にしなければならないからである。しかしながら、「環境問題が地球世界を1つにした」というような平凡な表現では、シナリオになるにはほど遠い。都市形成史、文明の生態史、生活文化史、気候区分、保有自然資源などの差異を組み合わせていけば、地球上にはおそらく何万という区分が存在するであろう。ここで登場するのがまさに当該地域の特徴を記述する「地域研究」である。ただし、その使い方には2通りある。

第1は、何万という地域についての地域研究をなるべく早く（少なくともあと50年以内に）完成するとして、最も簡単なシナリオは、地域相互が地球保存型の最適モデルを他の地域から学んだうえで、これを最後に各地域は鎖国政策をとることである。江戸時代の日本は多分最適モデルの1つであった。アメリカ、ロシア、中国、ECなどはこれが可能であろうが、日本はもう鎖国では生きていけない。

そこで第2に、何万という地域が資源・エネルギー・生態的に最適交流をすることが必要になる。米・ロ・中・欧もこれには異存はあるまい。ところが何万という要素地域間の最適交流にはまだ見本がない。過去の地球の歴史じしんが軍事大国を中心として、資源・エネルギーの奪い合いを目的に経済的にかつ一方通行的流れをつくってきたにすぎない。近代科学として20世紀に最も強力な発展を遂げた経済学と先端技術に目が眩んでいるかぎり、「最適シテス」が「最適」と強弁されて地球は破滅するであろう（今年のひとつの見物は12月の京都でのCOP3である）。

残る第3の道は第1と第2の中間のどこかにある。地球を何万ではない数十の亜閉鎖地域区分に分け、その内部の数十の地域相互での独自の交流をはかる。こうしてはじめてこの講義の必然性が浮上する。

今後この講義以外の他の「地域研究」で受講するように、従来の地域研究は、文化人類学ないしは民族学・民俗学の観察対象として他地域をとらえ、可能なかぎり

- 過去の学術分類に従えば、体系は大きくは3つに分かれる。
- 第1は生態汚染現象についての徹底した自然科学的研究、
- 第2は何が汚染源なのかに関する透徹した（常識的な判断ではなく、その根底に横たわる見えにくいモノを見るのがビジョンである）社会科学的研究、
- 第3は、第1・2の上につつま人類史的考察である。

2.2 科学のスタイル

無数の地域について文化相対的な比較学術体系をつくる方向を指向してきた。日本の巨大大学が地球上にナワバリをつくっているのがこの好例である。しかしこれでは50年という有限時間内の完成は覚束ない。むしろ、(研究者たちを含めた市民じしんが)みずからが住む地域に見習いながら、学術のスタイルをボトムアップ的に変革して、再度相互交流を直接地域にはたらきかける、新しい人文(人間の織りなすアヤ)原理を模索することが必要になる。

このような概念に命名したものが「地域学」となる。「学」になる前が「研究」である。

2.2 科学のスタイル

地域じしんまたは地域における人間生活に直接はたらきかける手段を扱う学問として工学分野に「地域計画学」があり、これを執行するのは「地域行政」である。圏域の規模に応じて、「地域」を「環〇〇圏」「国土」「地区」などにおきかえる。

計画学の基本は技術の効率的・最適適用にある(しかし都合のよい要素だけ集めた最適では、集められなかったあとに残った要素は最・非適になる)。技術体系のなかでは科学の援用をうけて「地域計画の科学化=地域科学」を確立することは、諸科学のなかでは最も遅れていた分野であった。しかし、科学技術という用語が安易に用いられる現状を上記の「地域学」の必要性と照らし合わせてみたとき、科学と技術の差異、ならびに分科の学としてのスタイルの特殊性を知っておくべきである。

科学(Science)の語源(Scientia)は広い知識で、知ること/認識である。これに対して工学技術の語源であるTekhneは、つくること/はたらきかけることを意味し、芸術・芸能をも包含する。Technologyの学であるEngineeringの語源は、Ingenuity(発明・工夫の才)である。

Scientistという語は1830年頃Whewellによって使われはじめ、狭い分野の専門的人間を意味した(例: musician 対 pianist, physician 対 dentist/-stのつくのが狭い)。このような専門家が、次節に述べるような学会という閉鎖型・学者庇護型の社会の形成を介して、いくつかの科学のスタイルをつくりだした。

イ) アカデミズム科学: 19世紀ヨーロッパの科学万能主義は、宗教にかわる真理の中心と位置づけられ、たとえば自然科学は、自然科学的学術研究の対象として自然を客体視した。さらに真理の無限探求が可能であるという発想から、原子力、遺伝子操作、臓器移植などの技術推進にもつながった。大衆が無知であれば容易にロ)につながる。

ロ) 体制派科学: それがわれわれの生活の向上に役立つという前提で、国の発展のために科学技術を促進する形式が採用される。正しい意味の御用学者の採用である。しかし狭い専門家としての御用学者は、政治体制の恣意的な目的に翻弄されることになる(好例が原子力発電: 放射能不安→住民対策→完全無知前提のパンフ→説明会→技術者が安全に努力→(だから安全だ、といういい方を廃棄物処理がまだ使っている)。

ハ) 市民のための市民による科学: イ)ロ)を越えるべき科学スタイルで、人類の共通の資産としての地球・自然・環境・地域の研究のサービス化をはかる(中山茂『市民のための科学論』社会評論社、1984)。地域学はこのカテゴリーをねらう。今後の市民は、研究者・学習者・新しいライフスタイルの創造者たるべきである。

2.3 社会と学会

2.3 社会と学会

- むしろ、(研究者たちを含めた市民じしんが)みずからが住む地域に見習いながら、学術のスタイルをボトムアップ的に変革して、再度相互交流を直接地域にはたらきかける、新しい人文(人間の織りなすアヤ)原理を模索することが必要になる。

- 計画学の基本は技術の効率的・最適適用にある(しかし都合のよい要素だけ集めた最適では、集められなかったあとに残った要素は最・非適になる)。

- イ アカデミズム科学
- ロ 体制派科学
- ハ 市民のための市民による科学

2.4 地域と大学の共同

2.4.1 アクションの諸形態

反貴族制度を標榜したフランス革命は、同時に反キリスト教の知識革命でもあった。それまで中世のギルド制社会（手工業／商人の特殊地域）の中に閉鎖され、のちに王たちがこれを徴用して、近代官僚制の基礎となった技術を一般に開放すべく、1794年に革命政府は王立の土木学校と工兵学校を統合してエコール・ポリテクニクをつくった。これがMIT (1861) や工部大学校・東京工大（もと蔵前工專）などに引継がれる（当初の日本の工学的分野にも、造形、造家、造船、造兵、造幣、造園など「造」のつくものが多かったことに注意）。

こうしたなかで、自然科学の専門家が誕生した。彼らは貴族でもなく、医者や聖職者でもなく、収入は少なかった。そこで彼らは1870年頃を中心に、専門家の共同体である学会を編成し、一般社会からみずからを区別して自分の仕事に「信頼性」と「権威」を確立することをはかっていたのである。当時の学会では科学者じしんの「倫理綱領」ともいうべきものが存在した。

イ) 知識の共有性 (communality) ロ) 知識の普遍性 (universalism) ハ) 無私のところ (disinterestedness) ニ) 組織的懐疑主義 (organized scepticism) である。つまり、学会の構成員を志すものは公有の知識に少しでも新しい成果をつけ加えること、それは普遍的な法則の確立に役立つこと、褒賞は同僚の評価だけであることを自覚すること、しかし他人の成果に盲従してはならず、批判的であってはじめて科学は進展することを意味した。ただし、今から70～90年前の牧歌的時代だからこそこの綱領は成立しえた。

最近の学会ではこれと正反対に、名誉欲と陰謀が渦巻いている。公有性の基準は既得権をもつものの保身に利用され（特許権）、普遍性は社会に対する科学の優位性を誇示し（無知な大衆）、無私精神は〇〇賞のために他人を出し抜くことに変わり、懐疑主義を貫けば学会からははじき飛ばされ、大学での昇進も覚束ない。

このような科学社会の実状に比較して、技術はもともと、大学や学会とは無縁に町工場から発展した。技術者を擁護したのがいわばギルド制であるが、技術はまだ必ずしも経済制社会の内部にはない（例：文明社会の野蛮人）ために、大衆に接近できる可能性を残している。これは技術発展の4段階を設定することで指摘できる。

イ) 工作的段階または道具の時代：技術の4要因である材料・かたち・目的・作業をすべて人間の腕がうけもった。
ロ) 工芸的段階または分業化時代：中世には作業が分化し、工と芸が分かれていく。いわば下請けと大工の棟梁が発生するが、まだ産業革命は起こっておらず、道具の発達や、自然力の利用がすすむ（例：奴隷の漕ぎ手による大型船から帆船へ）。
ハ) 工学的段階または機械制時代：動力の一部が水力・蒸気力などに置き換えられて産業革命が起こると、棟梁としての工学的制御者の仕事は、動力（エネルギー）の開発・効率化・最適制御へと移行する。

ニ) 工〇的段階または情報化時代：制御の機械化・人間による情報制御・システムの発想が進歩する。これが新しい時代を意味するのは、人間の仕事のみかけ上減って自由人が浮上するからで、ここに地域づくりの課題がみえてくるはずだ。

2.4 地域と大学の共同

2.4.1 アクションの諸形態

社会と学会との関係は、前述のように、必ずしも緊密な状態にあるとはいえない。特に近代日本では、大学はモラトリアム（決定猶予期間）の役割が大きく、現代社会の核心ともいえる企業は、いまでもなお大学での履修成果にあまり期待していな

● (当初の日本の工学的分野にも、造形、造家、造船、造兵、造幣、造園など「造」のつくものが多かったことに注意)

● 技術はもともと、大学や学会とは無縁に町工場から発展した。

● 工作的段階または道具の時代

● 工芸的段階または分業化時代

● 工学的段階または機械制時代

● 工〇的段階または情報化時代

2.4.2 大学の役割 の変化

い。この社会を対象とする社会学は、当然、大学をも社会の1要素としてとらえ、教育社会学という分野をつくってきた(例:有本章『大学人の社会学』)。しかし社会学は社会を分析する視点・技法には長けていても、アクションをしない。主としてアクションするのは、工学分野での計画学(まだ科学としての認知を受けていない)と経済学分野での経営学を習得した者だけである。

計画学派と経営学派とが相互乗入れをしつつ、地域を対象とした社会学的分析成果を応用して、アクションを行う例がふえてきたが、残念ながら計画シナリオが経済優先型にステロタイプ化している場合が多く、また、体制派御用学的計画派と正当なアクション派との区別も必ずしも明瞭ではない。特に既存の行政執行機構の制約を越えて行動できるコンサルタント(consultant)業が日本ではまだ十分成長していないことにも一因がある。つまり、十分な地域研究が行われず、上意下達型の平凡なシナリオが行政によって描かれて、コンサルタントは行政計画の下請けを強制される場合も少なくない。

地域行政(と中央政府)には確かにシナリオを描く役割があり、また、民主制度のもとにおいて行政が必要な理由は民主的意思決定の効率性にもとづいている。そこで、有効なシナリオが描かれれば、計画の実行は民間に委任するのがより効率的であり、発展途上の社会である場合を除いて、行政機能を肥大化させるのは明らかによくない。しかし「民間」がすべてボランティア化するほどには現代社会は成熟していないので、「民間=企業」となり、これが利益追及を第一義とする弊害が資本主義社会においては目立つようになる。企業の社会的奉仕(phil-anthology)が叫ばれるようになったのはこの点に関連している。そこで、効率型の行政や利潤追求型の民間では対処しえない地域問題を解決する役割を期待されるのが、いわゆる第三セクターないし非営利型公益財団である。アメリカの大型財団はこのような立脚点をもち、すでに約100年の歴史をもつ。イギリスで最も発展している公益信託制度では、この種の財団に対して市民が指定寄付をすることができる。

2.4.2 大学の役割の変化

このような認識で大学をみるとき、教育成果(人財)と研究成果を地域社会に供給するという大学本来の役割も、社会の成熟へのプロセスに応じて変化があつてしるべきだ。学校教育法第5章第52条(大学の目的)では、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」と述べている。昔は、「学の蘊奥(蘊は積み蓄える意)を極める」という表現も用いられた。「大学=教育・研究」の基礎はここにある。しかし、地域社会との関係は何も述べていない。

これに対して大学の歴史的推移(参考書:潮木守一『キャンパスの生態誌—大学とは何だろう—』中公新書)を概観すれば、college(=教授団と学生の集合体)が町衆とは区別されていたとはいえ、大学は都市のシンボルとして立地的にも都市の中心に位置した。このシンボル性を「象牙の塔=la tour d'ivoire」という場合があるが、俗世間を離れてもつばら静寂・高逸さを楽しむ芸術至上主義の境地や、学者が現実を逃避して観念的な態度で送る学究生活やその研究室を指し、これはもともと、厭世的哲学思想をもった19世紀フランスのロマン派小説家・劇作家であったAlfred de Vignyの態度を、Charles Augustin Saint-Beuveが批判して表現したものである。したがって、学生の対人口比率はきわめて低かったとはいうものの、大学は市民全体のものという認識がなされていたのである。Oxford/Cambridgeでも、

- しかし社会学は社会を分析する視点・技法には長けていても、アクションをしない。主としてアクションするのは、工学分野での計画学(まだ科学としての認知を受けていない)と経済学分野での経営学を習得した者だけである。

- また、体制派御用学的計画派と正当なアクション派との区別も必ずしも明瞭ではない。

- 教育成果(人財)と研究成果を地域社会に供給するという大学本来の役割

2.4.3 地学共同の主要課題

大学開放 (university extension) を始めてほぼ100年になる。アメリカの社会学者のMartin Trow は、大学数・学生数の増大プロセスに伴う大学の社会的役割を理論的に規定し、エリート大学、マス大学に続くものを大学開放を主軸とした“ユニヴァーサル大学”とした。しかし現在日本では一般には、既存の教育・研究と同じ内容(あるいは残渣)をそのまま社会教育化しているにすぎない。そのような大学を誘致して地域活性化をはかるといのは、工場誘致と同じである。

大学の地域社会への開放そのものを目的化したものが、「大学と地域との共同」であり、大学の地域社会への開放そのものを目的化したものが、「大学と地域との共同」であり、大学と地域との主要な交流が地域研究/action researchである。滋賀県立大学のフィールド・ワークは、この交流の大学側からの地域への働きかけの意味ももっている。

狭い意味の地域研究成果に続くシナリオづくり、計画づくりに加えるべきキーワードは、新しい目的の模索と合意形成の科学化である。ただしこの科学化は、専門分科であってはならない。既存の行政/民間のいずれでも実現不能な「人間主体の地域計画づくり」を考えたとき、すでに無機能性を歴史的に実証された「直接民主主義」、ないしは選挙違反や構造汚職を胚胎しやすい「間接民主主義」のどちらでもない、第3の民主主義を目標とした科学化である。さらに、1.3で示した技術発展段階の(二)をアナロジーしたとき、情報知能と人間がシナリオ~計画~設計~管理を介して「複合頭脳」化した状態を想定し、その細胞である個々の人間がより自由度が大きい状態で結びあわされて生存・活動している状態が目標とする(高度演出型の=highly inspired)社会システムであるとすれば、ここで第3の民主主義(人間・地域主義=demo-regiono-cracy)が実現されると考えるのである。

この複合頭脳の成熟を地域と大学とが共同で行うのである。最初から地球を対象にすることはできない。大学の1研究室単位では小学校区ていどが相応している。全国に3300を越す市町村があることを考えると、ほとんどすべての大学研究室が地域へ開放されるべきことがわかるのである。

2.4.3 地学共同の主要課題

以下のイ)~チ)の詳細の説明をしない。どの/いかなる?について各自で考察をしながら、今後のフィールド・ワークを行え。

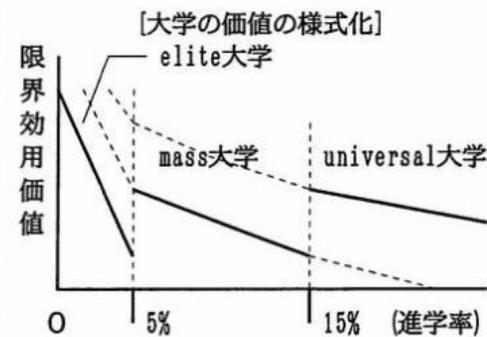
イ) ある計画の評価に必要な情報内容はどのようなものか

ロ) その情報を伝達するためのメディア、チャンネルはどのようなもので、表現形式はいかなるものか

ハ) 地域住民の相互接触によって提供情報の流れはどうなり、情報じしんはどう変質するか

ニ) 住民代表・行政の計画技術者・大学専門家の対話の場のつくり方はいかにあるべきか

ホ) この対話の場の運営のしかた、そこに付与すべき意思決定機能は何か



● しかし現在日本では一般には、既存の教育・研究と同じ内容(あるいは残渣)をそのまま社会教育化しているにすぎない。

● ここで第3の民主主義(人間・地域主義=demo-regiono-cracy)が実現されると考える

● 大学の1研究室単位では小学校区ていどが相応している。全国に3300を越す市町村があることを考えると、ほとんどすべての大学研究室が地域へ開放されるべきことがわかるのである。

以下のイ)～チ)の詳細の説明をしなさい。

どの/いかなる?について各自で考察をしながら、今後のフィールド・ワークを行え。

イ)

ある計画の評価に必要な情報内容はどのようなものか

ロ)

その情報を伝達するためのメディア、チャンネルはどのようなもので、表現形式はいかなるものか

ハ)

地域住民の相互接触によって提供情報の流れはどうか、情報じしんはどう変質するか

ニ)

住民代表・行政の計画技術者・大学専門家の対話の場のつくり方はいかにあるべきか

以下のイ)～チ)の詳細の説明をしなさい。

どの/いかなる?について各自で考察をしながら、今後のフィールド・ワークを行え。

ホ)

この対話の場の運営のしかた，そこに付与すべき意思決定機能は何か

へ)

この対話の場の運営のしかた，そこに付与すべき意思決定機能は何か

ト)

上記対話の場での決定を既存行政といかに関係づけるか

チ)

以上を含めて，大学の地域学部門が行政マン候補者に対していかなるリカーレント (recurrent)教育を行うか

2.5 大学の劇場化

2.5.1 劇場としてみた政治社会の問題点

2.5.2 大学の主演者・演出家・舞台装置・観客

2.5.3 大学のシナリオづくり

- へ) 行政主導に慣らされた市民に主権者の自覚を動機づけるいかなる機能を誰が役割として引受けるか
- ト) 上記対話の場での決定を既存行政といかに関係づけるか
- チ) 以上を含めて、大学の地域学部門が行政マン候補者に対していかなるリカレント (recurrent) 教育を行うか

2.5 大学の劇場化

以上のような地学共同を前提にすれば、現在の大学にとっては入試制度にも波及する大問題を抱えている。しかし、「諸学の継続性」というキーワードだけで、大学の地域への開放を第一義とすることは否定されよう。そこで、次善の策として登場するのが、大学の劇場化へ向けてのシナリオづくりである。[参考文献：矢野暢『劇場国家日本—日本はシナリオをつくれるか』TBSブリタニカ、1982]

2.5.1 劇場としてみた政治社会の問題点

地球上の統治機構は、一応国家体制の下での官僚支配が代表的である。しかし次第にその統治目的自体があいまいになりつつあり、例えば矢野の著書の下敷きになったバリ島では、王は興行主 (producer) で、特権的に君臨するというよりも劇の上演の頻度・内容・表現の豊かさ・巧みさで農民 (観客・裏方・役者) の忠誠を動員し、僧が演出家になっている、という。日本も、主として総選挙時を主要開演期間とする劇場国家になっている (主演者を国民が選び、国民は観客として税金という名の入場料を払う) が、明確なプロデューサーがおらず、またシナリオが全部外国からの借りものである (これは大学についても同じ)。

Demo-regino-cracy を仮説すれば、国家はなくてもよい。「国家の存在目的は敵国に残虐の限りを尽すことではもはやないし、生活の安定や福祉でもない、国家とは無目的に結果として存在する (丸谷オ一『裏声で歌へ君が代』新潮社、1982)」、「過去に国家エゴが非常に強くなった時代に文明が同時に発達したため、(エリート大学卒業集団が学歴社会を形成したように) 文明国家は誇りが強く他国に対し尊大になる (『劇場国家日本』)」ので、吉里吉里国が医学立国をはかる (井上ひさし『吉里吉里人』新潮社、1982) ように、国家は無目的化して各地域が地域立圏をはかればよい。ただし、地域立圏のプロデューサー機能を大学がもつべきである。

2.5.2 大学の主演者・演出家・舞台装置・観客

大学で主演者・舞台装置を設定する条件は揃っている。ただし研究・教育にこだわると、現在の国家と同じように無目的 (モラトリアム) 化する。ごく一部のエリート大学がいかに基礎研究を行っていると言弁しても、先端部の研究の実質は民間に重点移動している。それに企業は大学教育にもあまり期待していない、とすれば、主演者・舞台装置を大学開放に照準をあわせて再編成すべきであろう。いうまでもなく、研究・教育では観客であった学生も主演・助演側に入る。装置は「地域を見、地域から見られる装置」である。観客は、学生の親を經由して地域住民に拡大する。それにしても、大学PRの定期刊行物が足りない。演出家養成については、研究者養成とは違う方法検討しなければならない。Hidden curriculum が重要である。滋賀県立大学のフィールド・ワークはこの一環としても位置づけられる。『劇場国家日本』で「創造性と人間性に富んだある種の意味空間を理解できる人、といっているのが対応する。

2.5.3 大学のシナリオづくり

2.4.3の主要課題こそ地域学の大学のシナリオの内容を示したものである。

- 日本も、主として総選挙時を主要開演期間とする劇場国家になっている (主演者を国民が選び、国民は観客として税金という名の入場料を払う) が、明確なプロデューサーがおらず、またシナリオが全部外国からの借りものである (これは大学についても同じ)。
- 国家は無目的化して各地域が地域立圏をはかればよい。ただし、地域立圏のプロデューサー機能を大学がもつべきである。

3 自律的研究対象としての地域

3.1 地域計画の概念 (詳細は、水原渉「地域計画学」で講義)

3.1.1 地域/圏域を計画対象とする意義

3.1.2 圏域形成の史的考察 (略:詳細は水原渉「地域計画学」)

3.1.3 空間機能と地域の設定 (一部略:同上)

- さらに、次の4項目が一般論としてシナオリづくりに必要なとなる。
- 模倣をやめること (辺境の大学(彦根/環境)じしんそれを認識すること),
 - 世界との対話能力を身につけること (新文化翻訳語の創造の必要性),
 - 心理より理性・情緒より論理・情操より民主を重視すること,
 - 地域としての知性の水準を設定すること。

3 自律的研究対象としての地域

3.1 地域計画の概念 (詳細は、水原 渉「地域計画学」で講義)
 ここでいう自律 (autonomy) とは他律 (allonomy) に対する語で、フィールド・ワークで地域を観察する場合に、従来の地域計画学が採用してきたのとは違う立場を意味している。下表にみるように、主要な差異は、システムの観察者がシステムの外部にいる (他律)か内部にimmersed in している (自律)かどうかである。

型	他 律 型	自 律 型
観察者の位置 パラダイム 目的 情報 研究課題 性能, 機能	システムの外部 制御, 設計 誘導, 提示 コンピュータ形式 構造パターン 入力と出力のプロセス	システムの内部 認識論 情報構成, 相互持続性 内部形成 意味的關係 倫理, 認識, 補完

- 3.1.1 地域/圏域を計画対象とする意義
 圏とは、歩行圏、行動圏、通勤・通学圏、定住圏、影響圏、経済圏、大気圏、成層圏など、ある内容の広がりを示す。この構造には、主として政治、生産、流通、知識の4つが作用する。これに対して地域の類型には、区域、地域、領域、神域、聖域、広域、海域、空域など、ある境界を意識したものが多い。地域計画は、ある広がりをもった地域空間の中にかなる人間活動を圏域化するかという行為をいう。
 この節では、「空間」の概念が結果としてあまり反映されることなく、地域が形成されてきたこと、また、「地域計画」の理論が実際問題に対してうまく機能しなかったため、「脱・圏域」状況が先進諸国に発生して、結果として「環境圏」的概念も成熟していないことを論じる。
- 3.1.2 圏域形成の史的考察 (略:詳細は水原 渉「地域計画学」)
- 3.1.3 空間機能と地域の設定 (一部略:同上)
 ……多種類の機能の特徴づける次の要件を調査する必要がある。
- (a) 地表面の性状、とくに土地そのもののもつ条件
 - (b) 固有の場地的関係、とくに中心機能の立地条件
 - (c) 規模、スケールなど空間的広がり、とくに歴史的・地形的な諸条件
 - (d) 隣接空間からの区別、とくに山脈、河川、宗教拠点、道路などのもつ境界性
 - (e) より大きな地域の部分としての特徴、首都機能/衛星機能などに関連した階層性ただしこれらはいずれも地域概念の共通項であって、これらが、
 - (1) 同質(または均一) 地域: 農業地域、産炭地域、など
 - (2) 分極地域: 関連性・相互依存性・分極性などを示す (例: 雇用提供と労働力)

- 模倣をやめること (辺境の大学(彦根/環境)じしんそれを認識すること),
- 世界との対話能力を身につけること (新文化翻訳語の創造の必要性),
- 心理より理性・情緒より論理・情操より民主を重視すること,
- 地域としての知性の水準を設定すること。
- システムの観察者がシステムの外部にいる(他律)か内部にimmersed in している(自律)かどうか

3.2 地域診断

かほる 都市論
文化

(3) 計画地域：政策決定上の統合した結合地域のどれであるのかを決定しておかねばならない。

地域設定には、上の枠組にそって多くの調査が行われ（cf社会調査法）、多くの方法が開発されている。これらは広義には、地域科学として包括される。

形式地域として最近新たに重視されつつあるのが volunteer networkで、大は非政府組織（NGO/non governmental organization）、小は各種のpublic constituencyが成立しつつある。

3.2 地域診断

◆時間の関係で、この節の口述説明はしない。ただし今後諸君があらゆる機会をとらえて地域観察をするときに、念頭においておくべき視点を展開してあるので、どんなキーワードがあるのかを必ず概観しておくこと。与えられた課題に応じて、いかなる切り口で資料収集をすればよいかの情報を満載してある。平均的にいって諸君の頭脳は、以下に述べてある問題の範囲からははるかにかけ離れた所にあることを自覚しよう。◆

地域の診断とは、自律的立場から地域が抱えている問題を抽出して、それらを見ずからの生活に反映して問題の因果関係を認識することである。これまで他律型で計画・設計・制御されてきた地域は、経済的に発展することを主目標として、隣接ないし外部地域に悪影響を与えてきた。各地域が同じことを志向すると、地域間に軋轢が発生する。したがって同様のことが潜在的には地域内部の区分でも起こっているはずで、「自分のところさえよければ…」という発想では、自律的診断は行えない。しかしこの講義が概論である立場からは、既存の地域研究者がいかなる診断をしてきたのかを習得しておく必要がある。

以下では、(財)総合研究開発機構(National Institute of Resaerch Advancement)が国内の先駆的な問題解決の取組み事例や過去から1980年までの膨大な地域/都市研究文献からキーワードを抽出し、それらの相互関連/相互影響度を整理して地域問題 300選を作成したものを概観して、基礎的な知見とする。通常、診断の枠組は、縦割り行政に従って、都市基盤、生活環境、産業振興、教育、福祉・保健、文化・スポーツ、行・財政、その他などと大分けすることが多いが、NIRAの作業はこの逆の方法をとったのが特徴で、階層的にまとめながら問題グループに命名した点が、KJ法(後出)と類似している。

最上位の問題	上位問題	中位の問題(カッコ内が細目の問題で、合計300ある)
かほる	都市論	都市の概念と都市問題(都市の概念/歴史と将来像/地域間情報交換)都市と思想(都市の思想の流れ/地方自治とイ'オギ-)気候・風土と問題(風土の意味/地理的立地要件/寒冷地/離島振興)
	文化	都市文明(都市と文化/日本型文明創造)都市魅力(アメニティ/風格/景観)文化側面(文化行政/芸術・文化/宗教/国際文化交流)地方文化振興(文化見直し/都市と文学/地方言語/文化人の役割)歴史的環境保存(保存と生活の調和/文化財保護/歴史を生かした町づくり)

- 平均的にいって諸君の頭脳は、以下に述べてある問題の範囲からははるかにかけ離れた所にあることを自覚しよう。◆

はぐくむ 人口

まとめる 情報

はたらく 地域開発

流通

計画

情報

参加

立
司
治
安

行
財
政

立
司
治
安

行
財
政

地域開発

流通

はぐくむ	人口	分散と集中（J・Uターン／急増対策）動態と構成（動態予測／世代急増と地域的偏在）過疎対策（概念／生活環境／開発行政）流動問題（利点・欠点／昼夜間差／短期集中と移動／国際流動化）
	計画	盛衰・再生（発展の概念／地方振興／地方中核都市整備／企業都市の盛衰）制御（適性規模論／相互位置関係と機能分担／都心空洞化／スローロール／急成長の制御／遷都の意味）都市計画（構想／土地利用／プランナーの役割／ソフト面重視／ニュータウン開発／再開発／都市整備用地確保策）都市指標と記録（住みよさ／生活水準／類型化／記録）
まとめる	情報	情報化社会（合意形成制度／行政権抑制／広報・公聴／指導者の役割／都市適応力／自治体の情報管理／私権確保／情報地域格差／情報産業の役割）
	参加	住民意識（多様化／自然志向／社会病理／青少年問題／家庭の寛容／新旧意識）住民参加（住民参加／町づくり運動／自治意識振興／青年の／婦人の／高齢者の／団体の役割／職業人の立場／地方政治と権力／住民運動）コミュニティの役割（都市コミュニティ／町内会・自治会の現代的意味／公共施設整備とコミュニティ）
	立 司 治 安	議会・議員の役割（地域社会における／選挙と地域問題）地域問題と司法（問題調整と司法）国防問題（国防問題と地域のかかわり）治安と警察活動（都市における／スラムとドヤ街）
	行 財 政	行政サービスと行政機構（サービス範囲／応益負担／自治体役割／委員会・審議会役割／調整機能／科学的手法導入／事務合理化／職員の質向上／同和問題）都市と政府間関係（国際化と自治体／中央・府県・都市の関係／広域行政システム／都市の境界）地方財政の充実（財政逼迫／財政の自主性／超過負担／特定地域への財政援助／資金配分／民間資金導入／財政管理／特定プロジェクト財源措置）
はたらく	地域開発	地域経済自立（地域主義経済の可能性／地域産業の現況と振興策／地域資金循環／人間疎外を起こさぬ市場規模／伝統工業の見直し／国際問題と特定地域産業／中小企業の経営安定化）地域開発（理論と政策／公団の／公社の／民間企業の役割／公的・民間部門の調整／開発金融／開発政策の得失／開発利益の地域還元／開発に伴う補償と生活再建策／不況による開発ペースダウンとその影響）産業立地（理念と政策誘導／産業構造変化／立地と環境制約／立地のパブリック・アセプト・タンス／工業再配置と地方分散／大規模工業開発動向／内陸工業開発の可能性／都市型産業の動向）
	流通	流通近代化（流通近代化／地方商圏の形成・再編／商業立地と誘客力拡大方策／大型店進出とその影響／都市内

農林漁業

労働

あそぶ

余暇 観光

すむ

福祉 医療 消費 土地・住宅 環境

農林漁業	貨物流通／生鲜食品の流通・消費） 農業政策（総合農政と地域農政の調整／農村計画／農業経営の安定化／都市農業問題と展望） 営農環境（基盤整備／一次産業と災害／工業開発と農林漁民の対応） 一次産業労働力（農業人口の減少・高齢化／農外所得機会） 村落共同体の崩壊と現代的再生（農村福祉課題／農民運動と生活近代化／農民意識／ムラの崩壊と農村コミュニティ計画／農協の地域役割／農村教育） 漁業政策（水産業の振興／水産加工業の振興） 林業政策（経営安定化／林業と環境保全／木材の流通・加工）
労働	就業の場確保と労働力の関係（地方の雇用構造と労働力流動／労働市場の季節変動／就業の場つくりと働きがい／勤労者福祉／職業教育／労働時間変化と影響）
あそぶ 余暇	国民意識変化によるレクリエーション行動の変化（機会均等化／行動の変化） 都市での遊びの伝統と現代性（日本人の遊びの特質／まつりの現代的評価／大衆娯楽の育成／若者の挑戦） 余暇生活環境の整備（レクリエーション施設整備／レクリエーション活動の活性化／自然を生かしたレクリエーション／子供の遊び場整備）
観光	地域観光開発（地域社会への影響／環境保全／管理・経営／観光による地域開発／観光産業の動向／観光農林漁業／地域観光業界に対する外圧と衝撃／観光交通）
すむ 福祉	福祉（概念／負担／マンパワー確保／民間での対応／ボランティア活動／身障者（児）／高齢者／児童／母子（父子）福祉／生活保護／公災害被害者・特定疾病患者の救済／年金制度／死亡秩序の現代化）
医療	医療と健康対策（地域医療体系／住民健康対策／救急・休日・夜間医療／リハビリテーション／老人医療／出産と乳幼児医療／公的医療の役割と経営／医師・看護婦の確保）
消費	消費者運動および消費者行政（消費者保護と物価対策／消費者運動と生協の役割／消費者教育）
土地・住宅	土地問題と住宅政策（住居論／居注意識／住宅の質／土地・住宅と私権／地価・地代・家賃／ライフサイクルと住宅・環境／職住分離と近接／宅地・住宅供給政策／土地・住宅問題に対する民間対応／都市内農地と土地問題／宅地・住宅開発と環境問題／建造物の修復・保全／遊休土地問題）
環境	環境計画（居住地環境整備／環境に対する住民意識／環境権とその法益／環境アセスメント／都市オープン・スペース／都市環境と建築） 自然環境保全（自然保護／自然の意味と役割／都市の緑／都市環境としての水） 水のトータル・システム（都市での水資源確保と節水／水源地域対策／水道行政／下水道整備と水リサイクル） 都市と資源・エネルギー供給（エネルギー安定

うごく 交通

まなぶ 教育

3.3 地域構造の類型

3.3.1 類型化の方法

供給/省資源・エネルギー/エネルギー-備蓄と地域対応/エネルギー-技術開発と地域対応/電源立地) 廃棄物処理(システム改善/処理場立地/ゴミ処理を通じたコミュニティ運動) 公害対策(条例と体制/大気汚染/水質汚染/騒音・振動公害/土壌汚染・食品公害/熱汚染/地盤沈下/日照障害/電波障害) 都市防災(災害・防災/産業防災/消防活動)

うごく 交通

総合交通システムの検討(交通計画論/国土計画と交通ネットワーク/交通問題からみた町づくり/日常生活圏と交通機関の対応/交通施設整備における地域格差/空港・港湾の整備/空海交通の秩序/陸上交通の秩序/交通体系整備による地域影響/交通モード間の分業・競合と協力関係/都市内大量交通機関の見直し/交通技術革新/交通弱者対策/交通施設管理) 交通と環境の調和(交通公害/事故対策/混雑緩和/交通・物流における防災・安全対策/交通計画と環境の調和) 交通の経営問題(交通の経営と負担/過疎交通/民営交通および交通関連サービスの役割/交通と労働組合)

まなぶ 教育

生涯教育(世代間の英智の伝達/社会教育/社会体育/市民道徳/家庭教育としつけ/幼児教育/青少年教育/婦人教育/職場での学習・サークル活動) 学校教育(教育行政システム/機会均等化/学歴社会への挑戦/地域格差/費用負担/都市の発展育成における大学の役割と研究・学園都市構想/学校整備/特殊教育/教職員問題)

3.3 地域構造の類型

地域構造とは、地域診断項目が相互にいかなる関連/影響関係をもって構成されているかを構造的に把握することである。従来は主として他律的な立場で構造を把握することが多く、自律的な地域診断は、構造よりも診断項目の意味的關係を重視すべきと述べたから、少なくとも、地域を構成している主要因の機能的評価よりも、都市/地域空間そのものの使われ方に関する新しい目的の模索・発見、さらに計画行政の意向よりも主体となる住民相互の意味的關係のつくり方を含んだ意思決定論の合理化を助けるものでなければならない。地域構造の類型を考察・整理することの目的もここにある。

3.3.1 類型化の方法

3.2で示した地域問題300選は、その上の中位の57項目、さらにその上位の都市論、文化から教育に至る23項目をへてかほる/はぐくむ/まとめる/はたらく/あそぶ/すむ/うごく/まなぶの最上位の8大項目にまとめられた。この300選のレベルでの関連度/影響度の分析は、日本の全体を見渡して専門家が行ったものであるが、ある特定の地域に関してのみ分析すれば、おおいに異なった多くのパターンが出てくるであろう。たとえば、すでに暗示したように、「都市の発展育成における大学の役割と研究・学園都市構想」という小項目が、「まなぶ」から離れて「かほる」のカテゴリーに入ってくることも十分にありうる。こうして地域構造の類型が現われてくる。結局、類型化とは、「地域診断をし、新しいシナリオづくりをするため

- さらに計画行政の意向よりも主体となる住民相互の意味的關係のつくり方を含んだ意思決定論の合理化を助けるものでなければならない。

- 結局、類型化とは、「地域診断をし、新しいシナリオづくりをするための支援手段である」

3.3.2 類型の実例

3.3.3 最近の定型的分類

の支援手段である」ということができる。

3.3.2 類型の実例

国土軸型：全国総合開発計画（1～4次）では、まず国土軸（主として交通路）を歴史的な経緯をも考慮して設定し、300選から地域の型を積み上げてゆく（ボトム・アップ型という）のとは反対にトップ・ダウン型の形式で、地元の意向は必ずしも重視されないで地域を規定する型；例：東京－大阪軸，山脈軸（紀伊山地－四国山脈），河川軸（第三次の流域定住圏），東京－極集中型，など
発生的分類：

城下型：城を中心として、武家屋敷地，商職人町，寺社地構成された都市で、城郭を除いた地域は城下とよばれた。戦国期に成立して、近世社会の解体とともに、消滅したが、近/現代都市の主要な都市の多くが城下町をその系譜にもっている。（例：城郭をもたない戦国期のもの＝鹿兒島，人吉，山口，静岡（駿府府中），甲府/近世城下町＝織豊時代に城郭が拡大され，その外部に魚屋町，鉄砲町，紺屋町，呉服町，材木町，鍛冶町，大工町など，商・工業従事者を配置した。このような町名が今も残っているところが多い＝例：岡山，松山（大坂は違う；堺の町衆がつくった）。最近は「企業城下町」がふえている（例：門真市：ナショナル城下町，豊田市（もと拳母(ころも)市）：トヨタ自動車城下町）。

宿場型：いまの国道を昔は街道といった。陸上交通の要地にあり、宿泊や運輸などの便を備えた集落で、河口，山麓などに発達，同時に遊女が集った。平安時代には、淀川と神崎川の分岐点にあった江口（現存地名）には京都の貴族も遊興に通った。宿とは、平安後期から使われだし，鎌倉時代には駅と併用される。国土軸的にいえば，東海道ぞいに多く，天竜川西岸の池田宿，浜名湖西岸の橋本宿など，戦国時代にはは伝馬制をとる大名が出て，それにつれて宿が増加した。その頃にも，旅籠には飯盛女が旅行者の遊興に応じた。明治以来の鉄道網の整備によって多くの宿場は衰微するが，いま特別建造物群保存地区に指定されているものに，旧中山道（1日じゅう山道と読むな）の妻籠，会津西街道の大内などがある。現代の交通要衝は米原のような乗換え駅だけになっている。

門前型：寺社の参詣者をねらって，商工業者が店をつくり，参詣道路の両側を中心につくった集落で，神社の場合は鳥居前町ともいう。他に社寺奉仕者や信仰者が集落をつくった寺内(ジナイ)町や社家(シヤカ)町もある。例：伊勢・成田，日光，琴平，宮島，大社，高野（和歌山県）。この場合も遊樂的傾向とともに近代には観光的色彩が強まる。近代では奈良県天理市など。

港町型：港はもともと「水の門」のことで，瀬戸や川口を指す。昔は「津」「湊」などとよばれた（例：神戸市湊区/湊東区）。輻輳の「湊」は「あつまる」意味で，車軸に集っているチャリのスポークのことである。港町を現代では港湾都市といい，航海（主として遠隔地域間の貿易）に従事する船員のためにやはり遊興街とまた船に必要な燃料や水を供給できること，さらに近代では大型船が入港・停泊するための水深や静穏の条件が必要になった。

商工型：現代の地域の大部分

農民型vs. 漁民型：別図で比較を行う。

小型家産型：東南アジアに多い地域自立型地域/その上に無目的に王家がのっている。ヨーロッパで成立した都市国家との類似性もある。

3.3.3 最近の定型的分類

- まず国土軸(主として交通路)を歴史的な経緯をも考慮して設定し，300選から地域の型を積み上げてゆく(ボトム・アップ型という)のとは反対にトップ・ダウン型の形式で，地元の意向は必ずしも重視されないで地域を規定する型

- (例:門真市:ナショナル城下町，豊田市(もと拳母(ころも)市)：トヨタ自動車城下町)。

- 旧中山道(1日じゅう山道と読むな)の妻籠

3.3.4 今後意味論的に必要な類型=風土重視型

人口規模/人口密度別、形状(带状,多核,核心)別,立地位置(河谷,湖畔,海岸など),集落形態(孤立,塊,路村,広場など),ベッドタウン型など

3.3.4 今後意味論的に必要な類型=風土重視型

住民の自然観,人間と地物が醸し出す風格,建築物のシンボル(大学を含む),民間方位と民間信仰,風水思想(中国/朝鮮半島から琉球へ;亀甲墓のスタイル),音楽と騒音(楽音)=サウンドスケープ,CIづくり(視覚/聴覚/味覚(ガム都市)/肌ざわり(風合ともいう),嗅覚=にほひ/かほり)など=例:多摩ニュータウンの長池地区(スライド),Scientific-Scape

注) 風土/風:自然の代表,ただしフロー。土:人間を醸成する土壌,ただしストックとみるが,もちろん自然にも属する。

3.4 博物館都市(屋根のない博物館)

3.4 博物館都市(屋根のない博物館)

例:京都,奈良,彦根など(各自の生地を博物館都市として認知することを試みよう)

3.5 リサイクル劇場都市(Highly Inspired Societyの例)

3.5 リサイクル劇場都市(Highly Inspired Societyの例)

…リサイクルに「\」をひとつ加えると,リサイタル(ricital:recitative/レチタティーボ=語源的には聴衆をまえにした朗誦(ろうしやう)~白拍子)になる。これがオペラの中心にすわり,オペラにコメディとパフォーマンスが加わってミュージカルになり,コメディだけではない悲劇・寓話・幻想などの演劇性をもつようになる。リサイクル劇場都市を実現するには,リサイクルの面白さ・楽しさを各種メディアを通じて市民的に発信して,小説家・劇作家・シナリオライターの意欲に誘い水をむけることが必要である。

4 地域分析と意思決定支援技法(具体的方法は3年の講義・演習)

4 地域分析と意思決定支援技法(具体的方法は3年の講義・演習)

ここでいう地域分析とは,他の地域系・社会系の講義で習得する予定のものと同義であり,この全体講義では,分析の対象として3の地域診断項目として説明する。一般に,分析のレベルが詳細になるほど診断項目が激増し,地域への働きかけのシナリオ書きはもちろんのこと,診断の結果を整理することすらきわめて困難になる。したがって,あるとりまとめのコンセプト(端的に言えば,次の段階で必要になるシナリオ)がなければ,診断項目の重要度を判定して取捨選択ができないことになる。3年での講義内容は,このような目的に用いられるいくつかの技法を扱う。一般的には「意思決定支援技法」または「参加型システムズ・アプローチ」とよばれている。ここでは初歩的な方法についてだけ講義する。

[地域分析→意思決定→シナリオづくり]の連鎖は多重にかつ試行錯誤的に循環してくるわけで,これを何回くらい巡回させるかは,結局,「与えられた時間」「使用可能な費用」「関係者の根気」(地域研究における3大資源)によって決まると考えざるをえない。この資源を有効に活用するには,地域分析にも意思決定技法を反映させ,シナリオづくりにも意思決定支援技法を反映させる(上の[]内の→の向きを←にする)ことが必要になる。これには経験を積む以外にはないだろう。

4.1 KJ法

「学校では教えずすぎる」しかし「やり方は教えない」で始まる『知的生産の技術』(梅棹忠夫,岩波新書,1969)は,いまなおロングセラーとなっている。この「技術」の中心となっているB6判の京大式カード(1枚に1内容)が「ござね(鎧の札)」法として活用されるくたりは,KJ法と共通性をもっている。KJ(川喜田二郎)は梅棹と同じ学派に属し,KJがいう『発想法』(中公新書,1967)は,複数の異質の人間が京大式カードに集積した野外科学の情報を,[問題提起→探険→観察→

- 例:京都,奈良,彦根など(各自の生地を博物館都市として認知することを試みよう)

- リサイクルに「\」をひとつ加えると,リサイタル(ricital;recitative/レチタティーボ=語源的には聴衆をまえにした朗誦(ろうしやう)~白拍子)になる。

- これを何回くらい巡回させるかは,結局,「与えられた時間」「使用可能な費用」「関係者の根気」(地域研究における3大資源)によって決まると考えざるをえない。

4.1 KJ法

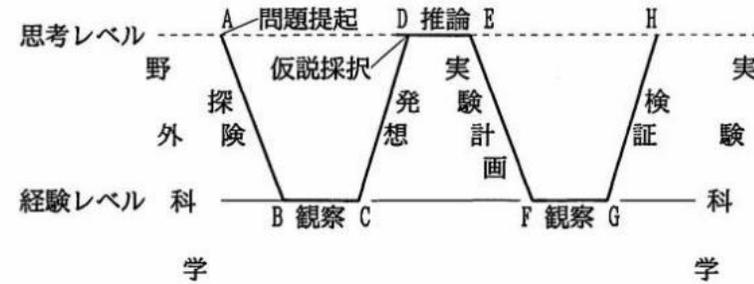
発想→推論→実験計画→観察→検証]のプロセスにそってまとめていく手順で、1で技術の発展段階を模して説明した「地域研究」の目標とほとんど同じである。

[KJ法の概要]

- (1) 書齋科学(虚学)・実験科学(理工学)に野外科学(実学+人文学)を加えること
- (2) KJ法の7ラウンド(次図)：ただしKJ法の信者のように拘泥する必要はない。
- (3) 使用カード：ノート・カード(京大カード)・名刺サイズ・ラベル・ポストイット・紙きれ etc.
- (4) Brain-Storming: 単位は6人(軍隊の分隊のサイズ/移動大学では(6×6=36人)×3=108人) / 参加者の意見を吐き出さず; 他人の意見の批判禁止/各発言の1行メモ(長短にかかわらず事柄別)の作成: 2時間のプレストで数10~100枚/
例: 「飲酒効果の是認的発言」よりも「酒は飲むべし」
- (5) 紙きれのグループ化(文殊カードも同じ)
トランプKJ法: 親近感をもつメモの「島」化/離れザルを無理に集団にいれ

[研究という名の仕事]

書 齋 科 学



ひと仕事の達成:

- | | | |
|-------------|-----------|------------|
| 1) 問題提起 | 5) 統合化 | 9) 構造計画 |
| 2) 情報収集 | 6) 副産物の処理 | 10) 手順の計画 |
| 3) 整理・分類・保存 | 7) 情勢判断 | 11) 実施 |
| 4) 要約化 | 8) 決断 | 12) 結果を味わう |

ない/グループ化は小島から大島へ(民主的にして専制的にしない/ただし特別の場合として非専門家の集団の場合には専門家のguidanceもあってよい)

(6) 写真KJ法: 末石の発案(文章化の苦手な市民用だが、情報量は案外多い) /

(7) 島々の空間配置と見出しつけ

因果関係の矢印: 因→果 矛>◁盾 相互↔作用

(8) 文章化(起承転結の方法/ISM法)

データと解釈を区別せよ(木下是雄『レポートの組み立て方』ちくまライブラリー, 1990.3)

(9) ござね法: つまり, KJ法には梅棹の技術が下敷になっているわけで, 唯一の違いは, 「ござね」はひとりで作れるが, KJ法は多数のブレン・ストーミング(brain storming)を含むところであろう。KJが創始した「移動大学」は, ブレン・ストーミングに不慣れな日本人を1種の非日常空間に置いて強

● 例: 「飲酒効果の是認的発言」よりも「酒は飲むべし」

● 写真KJ法: 末石の発案(文章化の苦手な市民用だが、情報量は案外多い)

4.2 文殊カード法

制的に発想空間に誘導するしかけであって、KJ法じしんには特段の創造性があったわけではなかったから、種々の情報産業が技法的にKJ法を発展させたのはごく当然であった。今日、「オビニオン・ゲーム」などとしてコンピュータ・ソフトにまで発展している。

4.2 文殊カード法

京大式カードにさきがけて存在した文殊（正確には文珠）カードは、プレーン・ストーミングが不得手な日本人を前提として中川米造（元阪大医教授・前滋賀医大教授）が開発したもので、B5判のカード（紙質は何でもよい）を次図のように3段に区切り、各段に着色するなどの工夫を適宜行えばよい。

円卓に着いた任意の数のメンバーは文殊カードを1枚ずつもち、最上段の“1”の欄に与えられた課題に応じて、調査結果～意見を記入し、これをそのまま右（または左）の人に渡す。自分には左（または右）の人から“1”欄にだけ記入されたカードがまわってくるので、これを読んで、刺激されて連想した事項、関連する事項などを記入する。この場合、プレーン・ストーミングのルールと同様に、第“1”欄の内容に対する「批判」は禁止される。この状態でさらに隣の人にカードがまわされ、第“1”欄と第“2”欄を参考にして第“3”欄への記入をする。

このプロセスは、トランプ式KJ法と酷似しているが、人数が3人以上の場合にはカードが一周しないので、もっと長い用紙を多段に区切ることも可能である。しかし、「三人寄れば文殊の知恵」という故事にちなんで命名されているので、あまり複雑な変形をするとあとの整理がかえって困難になる。3人にカードがまわった段階で、いったん“1”-“2”-“3”を切りはなして全員に紹介するか、KJ法を適用してなんらかのまとめをしたあとで、再度文殊カードを配布して記述を再開する（このとき着席順を変えるのもよい）ことにすればよい。

なお、文殊カードは「1人発想法」にも利用可能である。常時何枚かのカードを携行して、違った場所で時間をおいて前の記述をみて気づいたことを記入しておけば、レポート作成などの助けとなるはずである。これは多くの研究者がインフォーマルなかたちで実際にやっていることでもある。

4.3 地域（環境）カルテ

カルテ（Karte;独語／英語ではcard）とは、通常、医師が人間の診察結果を記録するためのカードまたはその内容を指す言葉である。これを地域診断結果の整理に適用したのが「地域カルテ」である。したがって、京大カードにしる、文殊カードにしる、地域問題を対象に用いればすべて地域カルテになるわけであるが、これが個々の診断項目を記載したカードと異なる点は、

イ) 記述には文章化にこだわらず、特に、ある共通課題で統一した「地図化」を重視する、

第1欄	記録者
第2欄	記録者
第3欄	記録者

- 京大式カードにさきがけて存在した文殊(正確には文珠)カードは、
- カルテ (Karte ; 独語／英語ではcard) とは、通常、医師が人間の診察結果を記録するためのカードまたはその内容を指す言葉である。

4.3 地域(環境)カルテ

ロ) カードをやや大判にして、診断対象の地物の写真などを入れるとともに、多くの診断項目を予め設定して対象の現況を記載する(例示)、
ハ) カードそのものを最初から任意縮尺の白地図として、その上に診断項目を書き込む、
のいずれかの方法をとる点にある。

人体のカルテを例にすると、イ) は、人体の特徴を痩身型/肥満型などの絵で表わすとか、あるいは吹きでものの場所だけを描いたもの、ロ) は、普通の身体検査カード、ハ) は、からだの模型を描いたカードの周囲に病巣部をくまなく記述したもの、を想定すればよい。

ひとむかし前アメリカで Discover Neighborhood, Discover Our City という言葉が流行した。これは自分たちの町を見直して、その修復や活性化を市民じしんがやってゆこう、という運動であったのだが、日本では国鉄の“Discover Japan”というコピーとなって、商業主義的な旅行キャンペーンになってしまった。その後 T. West が“A Community Map”という論文(R. S. Wurman, ed. Making the City Observable, MIT Press, 1970)を書いたことによって、これが具体的なかたちとなって日本にも入ってきたといつてよい。

アメリカでは、当初、集会場に広げられた大きな白紙の上に、人びとが町の様子(道、教会、運河、歴史的モニュメント、学校、遊び場など)を思いおもいに書いていった。この場合は単に印象を記述すればよいのであるが、市民がまちづくりの主演として地域や環境をよく知る必要があるという前提をおけば、白紙に印象を描く方法にもそれなりの技法が必要になるわけで、このような願いを支援するかたちで建築学者や心理学者が共同提案したのがコミュニティ・マップであった。上記の分類でいうとハ) に相当する。これをマップのレベルにとどめずに、コミュニティ規模での空間的特徴を書きとめ、同時に生活環境を診断して、必要な対策要望事項なども書き込めば、これがコミュニティ・カルテとなる。

ハ) の形式のカルテには、何人かのグループが作成したものを次のグループが読みとって、それに関連した事項(この場合は反対意見にも意味がある)を記入すようにすれば、文殊カードの特徴を折り込むことができるし、このカルテをもって再度探険に出かけることができる。探険の方法には、ロ) の方式に従って、予め、「虫の目」「鳥の目」「子供の目」「地球への目」などを設定することによって、異なったタイプのカルテとなる。

ロ) の分類に属する地域カルテは、地域内に存在する多くの同種の環境要素(住宅、道路、看板、……、鎮守の森)について、上記のようなある共通の目、ないしは、広さ、高さ、色調、用途、付属物、空間占有率、などなど、調査・診断者に共通した判断基準を与えて、多数のカルテを同時に作成するのに有効である。この結果をあらためてハ) のカルテにプロットすると、全体的関係を把握するのに役立つ。

これに対して、イ) のカルテはやや異なった目的をもっている。ロ) ハ) と同様に、たとえば、自動販売機だけの分布をマップ化すれば、特徴的かつ具体的・客観的なカルテができるのであるが、日常のイメージだけにもとづいて(具体的な調査を行わずに)地図を描いたとき、これをイメージ・マップないしはメンタル・マップ、または「認知地図」といい、ロ) ハ) が必ず客観的であるのに対して、主観的な地図ができあがる。これによって、日常その人が潜在的に何に関心をもっているかが診断できるとともに、逆にその人の性格または事物の認識力を明示することに

● ハ)の形式のカルテには、何人かのグループが作成したものを次のグループが読みとって、それに関連した事項(この場合は反対意見にも意味がある)を記入すようにすれば、文殊カードの特徴を折り込むことができるし、このカルテをもって再度探険に出かけることができる。

● 日常のイメージだけにもとづいて(具体的な調査を行わずに)地図を描いたとき、これをイメージ・マップないしはメンタル・マップ、または「認知地図」といい、

4.4 環境家計簿(略： 長嶋俊介「生活環境 論II」参照)

今後のための重要な 参考文献

なるから、人間そのものの心理学的～行動科学的診断にも役立つことになる。しばしば、室内の家具配置をイメージ・マップ化させて、幼児の性格診断用に使われている。地域カルテとしては、自宅から学校までの主要目標を描かせて、事物の認識度を調べたりする。

4.4 環境家計簿(略；長嶋俊介「生活環境論II」参照)

[注] 昨年度までは、このあとに「若干のケース・スタディ」を講義した。本年度は時間の関係で割愛し、選択科目の「生活環境論I」に移す。興味があれば次年度以降にでも部分的に聴講すること。一般市民がやや長期間のフィールドワークをへてまとめた「レポート」の形をとったものうい中心としている。ある地域が「別の地域に学ぶ」という意味で、日本での「地域学」の嚆矢と位置づけできるものでもある。もちろん3週間単位くらいの現地研究を軸とする「フィールドワークI」では、これらの事例に準じた成果をを挙げることはとてもできない。しかし、「フィールドワークII」→「フィールドワークIII」さらに卒業研究へ、と進める過程には非常に参考になるし、またこれら事例の第1歩も「虫の目」～「鳥の目」の探検からスタートしたことを忘れてはならない。

今後のための重要な参考文献

佐藤郁哉『フィールドワーク ― 書を持って街へ出よう』新曜社、¥1854

ざわめく街の死角へ、異文化の深みへと潜入し、
文化という複雑な現象を、
その生成の場から解きほぐす、
“技”としてのフィールドワーク。
その背景にある考え方から、
方法・技法・情報整理のツールまで、
魅惑的なキーワードで生き生きと説く。

- ある地域が「別の地域に学ぶ」という意味で、日本での「地域学」の嚆矢(こうし)と位置づけできるものでもある。
- もちろん3週間単位くらいの現地研究を軸とする「フィールドワークI」では、これらの事例に準じた成果を挙げることはとてもできない。しかし、「フィールドワークII」→「フィールドワークIII」さらに卒業研究へ、と進める過程には非常に参考になるし、またこれら事例の第1歩も「虫の目」～「鳥の目」の探検からスタートしたことを忘れてはならない。



印象

文字

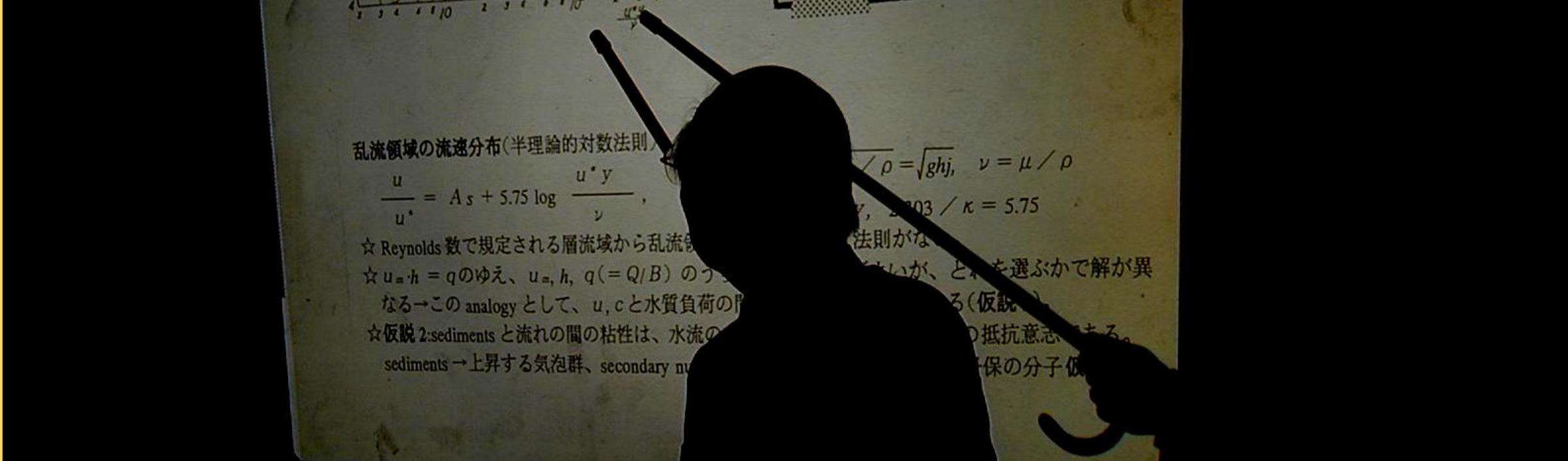
圧倒的な文字の
ボリューム
省略しない
正誤に厳しい

表裏

表層的な知識と
潜在的な事実
さあ考えてみよ

ふうし 諷刺

() を使う
突っ込み
シナリオ・台本



印象

ちやくせつ
直截

かみくだかない

平易

専門用語は少ない
概念に逃げない
文章は平易

ちょうち
釣致

フック
考えざるを得ない
解答ではない

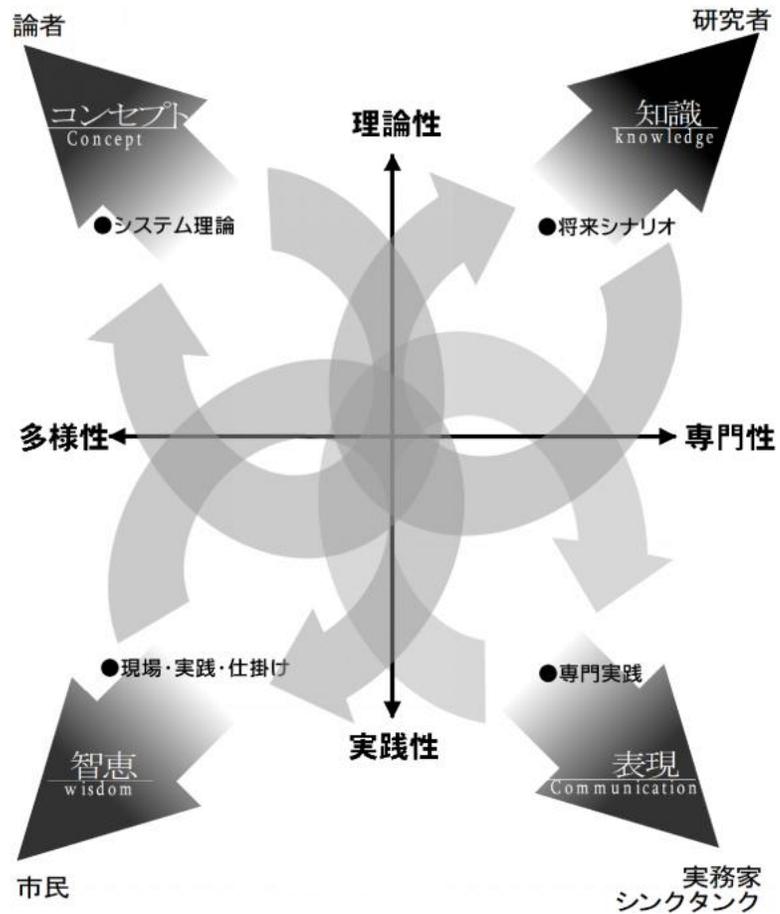


図2 「理論性－実践性」と「多様性－専門性」の軸からみた方向性

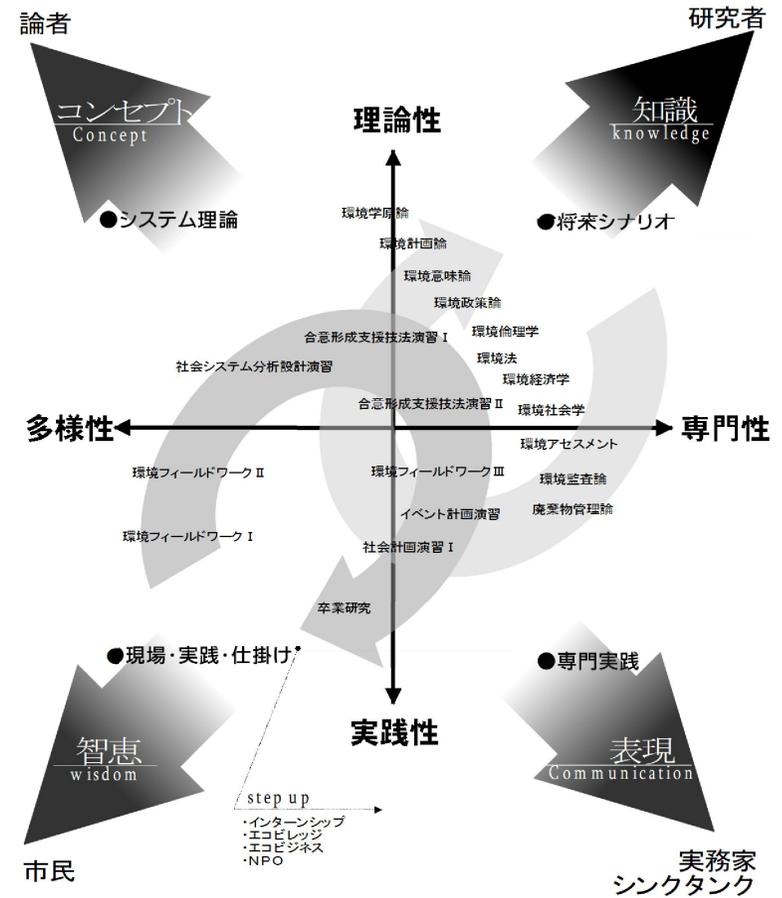


図3 滋賀県立大学環境科学部環境社会計画専攻における教育プロセス